The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

〔パネル・ディスカッション　提案２〕

外国の読書力評価から我が国の国語学力を考える

足　立　幸　子

１．はじめに―外国の動向から考える意味

提案者は読書指導の研究をしてきたが、外国の読書指導研究者と交流したり、外国に長期研修で滞在したりしてみると、「読解」「読書」の区別から始まって、研究上の問題意識や関心の隔たりを感じる。我が国で「読む」ととらえられているものは、外国には通用しないのではないだろうか。最近我が国ではPISA読解力の議論がさかんで、「国際標準」という言葉も聞く。しかし、米・英・豪などの英語圏や西・墨などのスペイン語圏の反応の仕方を調べると、どうやらPISAの結果は我が国ほど議論をもたらさなかったらしい。そのような国々では、PISAはさほど違和感を覚えさせるものではなかったのであろう。そうであるならば、諸外国では、何を「読む」ことと考えているのか。すなわち、外国の読書力評価を調べれば、国際標準を踏まえた「読む」あるいは「国語学力」とは何かが分かってくるのではないだろうか。そこで、本提案では、外国の読書力評価例に見られる「読む」力をとらえた上で、我が国の国語学力を考えたい。

２．現代の言語環境―マルチリテラシーズ

英語圏の読書指導研究者の中で、最近支持されている重用な概念は、米・英・豪・南アフリカの言語教育研究者集団ニューロンドン・グループによって提唱されたマルチリテラシーズ（Multiliteracies）である。この概念は、現代の言語環境の研究成果を踏まえて構築された。マルチリテラシーズとは、リテラシーがマルチ（多様）な状況にあるという意味である。マルチとは、二つの方向から考えることができる。一つは、社会のグローバル化にともなって、社会の中に言語や文化の多様性が現れたことである。もう一つは、情報通信技術の発達から、多様なコミュニケーション様式（メディア）が生まれたということである。この多言語（文化）・多様式（メディア）の状況は、外国語の読み書きをしメディアを使いこなせばいいという単純なものではない。なぜなら一つのリテラシーは一つの文化・社会・価値観の安定した基盤に基づいているからである。表１は、ニューロンドン・グループが分析した現実と未来像である。労働・公共・個人いずれの生活においても、私たちは、安定した一つの基盤を持ちえず、多様で複雑で多層の生活世界を生きていかなくてはならない。極論をすれば、明治以来の国語科教育は、日本人に共通する一つのリテラシーである「国語」というものを浸透させた。すなわち、国語科の歴史は、日本という一つの文化・社会・価値観の規範が作られ浸透した過程であったと言ってよい。例えば、教科書教材を読んで登場人物の気持ちを考えるという授業は、他人の気持ちを思いやるという日本人の行動規範を教えた授業であったということができる。マルチリテラシーズの授業では、そのような単一の文化・社会・価値観の規範を教え込んでいくのではなく、学習者が自覚的にそれらを共存させたり選んだりするということになる。そこでマルチリテラシーズが強調するのが、学習者が行っている学習を自らメタ的に自覚的に見ることの必要性である。

表１　社会の未来像

	変化している現実	デザインできる社会の未来像
労働生活	高速資本主義	生産的多様性
公共生活	市民概念の低下	市民的複雑性
個人生活	プライベート空間の侵略	多層の生活世界

３．現代に求められる国語学力―DARTの例

それでは、マルチリテラシーズを支持している国々では何を国語学力ととらえているのであろうか。本提案では、オーストラリアのDART（Developmental Assessment Resource for Teachers）を具体例として、そこで評価されているものを見ていく。ここでは、DART小学校中学年英語の「見ること」「読むこと」「話すこと」「聞くこと」「書くこと」の５つの領域のうち、「読むこと」の領域を取り上げ、その中身を検討する。

(1)読む素材・解答冊子と設問

DARTには、雑誌形態の読む素材が使用され、解答は専用の冊子に設問と解答欄がある。その雑誌の

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

内容とジャンルは、①神話の９コママンガ、②イグアナの説明文、③日食の新聞記事、④蚊についての詩、⑤飛び出すカードのつくり方の指示、と多岐にわたっている。さらにこの雑誌とは別に、⑥絵本を使った予想問題がある。特に我が国と異なるDARTに特徴的な素材・設問を取り上げる。

①の９コママンガは、８コマ目の文のところと９コマ目は絵も文が、破れたようになっている。そして設問は、８コマ目で絵にあった文をつけること、９コマ目ではこの神話が終わるように絵と文をつけることである。

②は、我が国の科学的説明文と似ているが、「イグアナの手足（limbs）の１つに○をつけなさい」と、写実的な絵を使って解答する設問がある。

③は、日食の写真、その写真に基づく科学的説明、バシラン諸島の人々の日食の受け止め方、アジアの小学生が日食を見ている写真と説明、日食の見方に対する警告文からなっている。実際、現実生活の中で私たちが目にするものは、一人の筆者による一貫した説明文ばかりでなく、複数の情報や形態が入り混じっているこのようなものである。

⑤は、９枚の写真を中心に構成されている。最初の７枚は作り方の指示に対応する写真、８枚目は完成したところ、９枚目は完成したカードを持って喜ぶ４人の子供と１人の担任の教師が写る写真である。設問のいくつかを挙げてみる。まず、解答冊子の方に、４種類の本の絵が書いてあり、タイトル「イソップ童話」「工作のアイデア」「ブタ＝ブタの真実」「やわらかいおもちゃをつくる」が見える。１つ目の設問は、「次の本のうち、この飛び出すカードをつくる指示が書いてあると思う本はどれか」である。次の設問では「６の前に７をしたなら、飛び出すカードはそのまま作れるか」というもので、理由も説明することになっている。さらに、別の設問では、「なぜこのつくり方の指示の最後に、この写真（９枚目）があるのか」という設問がある。

⑥では、絵本の表紙だけを見せ、タイトルの意味を尋ね、表紙とタイトルだけを手がかりに話の内容を想像させる設問がある。

(2)考察

DARTが我が国の一般的な国語学力テストと異なる点は四つある。一つ目は、特に①③⑤に見られるような、現実の環境に根ざした多様な形態の素材を扱っている点である。二つ目は、①⑤のようにジャンル意識に基づいた自覚的な読書活動を評価していることである。三つ目は、①の絵に描く、③の絵に○をする、⑥自分の予想を答える、といった多様な解答形式である。四つ目は、⑤⑥のように、文章ではなく本や普段の読書経験を反映できる設問があることである。これらを一言で言うと、DARTは現実の環境にある様々な素材を様々なままに、自覚的にメタ的に読んで様々なやり方で反応するということを「読む」こととしてとらえ、評価していると言える。今回は、英語に限ったテストなので、多言語こそないが、多文化・多様式（メディア）をリアルに自覚的に読むという、マルチリテラシーズの考え方と一致する素材と設問であったといえる。

我が国の国語科教育では、説明的文章が扱われるが、②③⑥のように現実の生活に即して絵・写真・見出しなどの様々な形態や、多様な情報を提出するものではない。文章という形態で一人の筆者の一貫した考えを読み取らせるものとなっている。また、文学的文章であっても、①のようにマンガを子供に描かせてみることによってその読みを評価するようなことはない。結論として、我が国の国語科が評価していた「読む」ことは、諸外国に比べて、非常に狭い範囲に終始していると言える。

４．本提案の主張―現実に根ざした国語学力と評価の開発

本提案で主張したいことは二つある。

一つ目は、変化しつつある言語環境から目をそらさず、私たちの読む生活を十分に踏まえて「読むこと」の内実を広げて、それを指導していく必要性である。従来のように、安定したものの見方･考え方ではなく、複雑な現在の言語環境を反映させ、共存させたり選び取ったりするものでなければならない。

二つ目は、評価の開発の必要性である。外国の評価を見てみると、我が国の評価の方法が、いかに狭いものであるかということがよく分かる。国語学力の内実を広げるためには、その評価の開発をセットとして考えて取り組んでいく必要がある。

文献

足立幸子（2005a）「マルチリテラシーズ」『月刊国語教育研究』第395号、46～51頁

足立幸子（2005b）「読書力評価の国際標準にむけての一考察(3)－オーストラリアのDARTの分析－」『人文科教育研究』第32号、45～61頁

（新潟大学）

NII-Electronic Library Service